

杉本春生全集

別卷

# 杉本春生全集

別卷

沖積舎

杉本春生全集

別卷

一九九五年九月三十日発行

第六回配本

編者 杉本 三千代

発行者 沖山 隆久

発行所 株式会社 沖積舎

東京都千代田区神田神保町一・五二

電話〇三・三三二九一・五八九一

振替〇〇・一三〇・七一七七六三二

シンセイ印刷・小高製本

Printed in Japan 1995

ISBN4-8060-6519-6 C0092 P6800E

杉本春生全集別卷  
目次

|                          |       |    |                       |        |     |
|--------------------------|-------|----|-----------------------|--------|-----|
| 杉本春生詩集「初めての歌」            | 秋谷 豊  | 15 | 杉本春生さんを偲ぶ             | 金丸樹一   | 66  |
| 時代を超えた新しい省察と感動 つねに人間と歴史の |       |    | 海とことば                 | 北村 均   | 69  |
| 新しい全体を構成する論点             | 秋谷 豊  | 18 | 水晶の彼方——杉本春生先生を悼む      | 北村 均   | 71  |
| 詩集「はじめての歌」               | 鮎川信夫  | 21 | 杉本先生のこと               | 甲田和子   | 73  |
| 詩人への新しい認識法示唆——杉本春生氏の評論集  | 安西 均  | 22 | 杉本春生氏を悼む              | 後藤明生   | 75  |
| 死を、詩の思想に転化——杉本春生著「抒情の思想」 | 安西 均  | 24 | 見続けた生と死の姿——杉本春生さんを悼む  | 小林慎也   | 77  |
| 杉本春生さんの思い出               | 安藤欣賢  | 26 | 杉本春生さんのこと——胸底を流れた川は   | 小林慎也   | 79  |
| 杉本先生のこと                  | 井上美登利 | 29 | 清澄な抒情精神と明証な論理——杉本春生追悼 | 相良平八郎  | 81  |
| 杉本春生詩集「初めての歌」            | 井野口慧子 | 32 | 純粹経験と人間探究——追悼・杉本春生    | 相良平八郎  | 83  |
| 夕映え——杉本春生先生に             | 井野口慧子 | 38 | ある独自の透徹性——『森有正論』を中心に  | 佐藤泰正   | 86  |
| 水晶忌                      | 井野口慧子 | 41 | 追悼文                   | 境 邦夫   | 89  |
| 「水声」後記                   | 井野口慧子 | 56 | 弔 辞                   | 三分一寿美子 | 90  |
| 木曜の昼午後二時——杉本先生へ          | 大塚尚子  | 57 | 「現象」                  | 杉谷昭人   | 92  |
| 蓮——杉本春生に                 | 大野 新  | 59 | 春生との日々                | 杉本三千代  | 94  |
| 肺病作家の残党                  | 大野 新  | 62 | 海辺の闇                  | 杉本三千代  | 98  |
| 詩人——杉本春生先生に              | 乙姫美子  | 64 | 暑き日に記す                | 高木三恵子  | 101 |
|                          |       |    | 弔 辞                   | 武田ミキ   | 104 |

「表現空間」——パフォーマンス・イン・スクエア<sup>84</sup>

田中美羽 106

鳩の位置——杉本春生氏に

棚田輝嘉 109

杉本先生へのたより

鶴原正孝 111

会員追悼——杉本春生の面影

唐川富夫 115

異郷の詩精神——杉本春生全集第一・二巻をめぐる

唐川富夫 117

唐川富夫

戦後批評の途上で——追悼・杉本春生

唐川富夫 121

杉本先生の死より

中本耕治 124

杉本春生先生を偲んで

中本耕治 126

批評的雑談——杉本春生著「現代詩の方法」にかんして

沢村光博 128

沢村光博

杉本春生「現代詩の方法」について

高田欣一 132

「刮目して期待するや切」

西 和子 136

通津湊——杉本春生

野上悦生 139

我が師 杉本春生

野上悦生 143

林中に在って市井を透視するひと——追悼・杉本春生

原崎 孝 154

杉本さんを憶う

蛭本博彦 157

杉本春生さん追悼

福谷昭二 159

棒高飛びの人——追悼・杉本春生

藤本 仁 161

金子光晴と杉本春生

堀木正路 165

裏門の喫茶店

美濃地裕子 169

裸形の果実——杉本春生論

宮田千秋 170

父のこと

山田（杉本）史子 181

へ教え子の手紙より

山邊直子 185

「七月が去って」

横田由佳 187

七月がきて

横田由佳 189

感覚と情念に染めぬかれた言葉

横山昭正 191

弔 辞

和田 健 193

主知的でユニークな評論——杉本春生氏を悼む

和田 健 195

詩人たちの自然観分析に興味——杉本春生著「光と闇の

磯村英樹 197

なかの詩人」その自然と人間性

磯村英樹 197

杉本春生試論——詩の初めと抒情への道

北村 均 199

敬愛の念貫き詩的な美しさ——「森有正——その経験と思

清水孝純 215

想——」

清水孝純 215

|                             |     |
|-----------------------------|-----|
| 鋭い解析力の評論——『光と闇のなかの詩人』 柴田基典  | 217 |
| 根源的な邂逅の書——純粹意識の明証性たどる『森有正論』 | 218 |
| 園田三郎                        |     |
| 『森経験』への聖なる巡礼と繊麗な分析——『森有正——  | 221 |
| その経験と思想』                    |     |
| 田辺 保                        |     |
| 杉本春生先生                      | 224 |
| 野口栄子                        |     |
| 遥か…遥か…彼方の杉本先生へ              | 225 |
| 榎田誠一郎                       |     |
| 杉本春生作品追補                    |     |
| 苦悩する△黒▽と自然の模様化——シベリア・シリーズ   | 231 |
| について                        |     |
| 現代彫刻と詩における反自然性——高村光太郎から李禹   | 243 |
| 煥へ                          |     |
| 初出一覧                        | 264 |

一度は杉本春生さんにお目にかかりたいと思いつつ、漸くその日を得たのは、一九八四年の十月二十日であった。各巻に杉本さんの解説が附された渡辺修三著作集全五巻と別巻の六冊が完結したのが、その前年の一九八三年である。その翌年はたまたま渡辺修三の七回忌にあたる年でもあったので、件の著作集完結を記念する意味あいもこめて特にご講演をお願いし、延岡市まで来ていただいたのである。

ご健康がすぐれない上に、非常にご多忙であることを知りつつも敢てお願いしたところ、大変快くお引き受けくださったのである。

じつは、渡辺修三著作集は宮崎の鉾脈社の社長である川口敦己さんが、その出版業創立十周年記念事業の一つとして企画されたもので、その編集にあたったのが当時の「赤道」グループである。本多利通、本多寿、みえのふみあき、杉谷昭人、田中詮三、それに金丸の面々である。いずれも渡辺修三にそれぞれの思いで私淑した者である。

その編集会議を各人の家持ちまわりでやったが、ほぼその目鼻もついた頃、解説をどなたにしていたかどうかということになり、最初に杉本さんの名が挙げられたのである。田中詮三宅であった。それで早速にも杉本さんにその旨、まず電話でお願いしてみたところ、自分も一度はぜひ丁寧に読んでみたい詩人であったからということで快諾していただいたのであった。

それまでに私が読んでいた杉本さんの著作物は、新聞や雑誌に発表されたもの以外では、「抒情の周辺」と「森有正論」の二冊きりであった。ユリイカ新書の一冊として刊行された「抒情の周辺」には忘れられない想い出がある。

当時、「囲繞地」の同人でもあった私は、どうしてもそれを読みたく、たしか相良平八郎さんにそのことを伝えたのであった。刊行されて二、三年は経っていたかと思う。ところが思いがけなく達筆のサインつきで、直接、杉本さんから鄭重なお手紙まで添えられて、その本が送られてきたのである。すでに絶版になっていたもので、これはまことにうれしいことであった。

その詩に対する読みの深さに、漸く詩作行為に就いたばかりの私は、とても多くのことを教えられる思いがしたものである。詩を問い、詩人を問うことの魅力を、私は初めてのように感得する思いであった。

この、詩に対する読解力と詩人のあるべき態度を凝視する勁い視力は、「森有正論」でもまた遺憾なく発揮される。「二個の存在をこえて、人間の根源ともいえる存在そのものの呼吸を示している」ような森有正への冷静にしてかつ情熱あふれる接近の様子には、ただならぬものがある。杉本春生が森有正に化身し、森有正が杉本春生の全身全霊を借りて改めて語りだしているような具合いなのである。病弱の身でありながら、よくその病弱に耐え、終生、学究の道を踏みしめて歩かれた詩人、杉本春生のまことに真摯な面影が今更に目に泛ぶようである。

このひたむきさが、「抒情の周辺」一冊に対してさえ、「大きな修正に直面」している自覚となり、のちに「光と闇のなかの詩人」一冊となって刊行されることにもつながっているのであろう。

杉本さんはまた、われわれかつての「赤道」グループに対して、じつにきびしくあたたかい眼差しを注ぎつづけてくださった。とは言うものの、なお遠く及びがたい存在であったことは事実である。

それでも敢て渡辺修三著作集の解説をお願いしてみた理由は、その綿密にして深い読解力を示しつづけておられるこの方を措いてはないという思いに駆られたからであった。

実際に、その解説がとどけられるたびに、編集にたずさわった者一同のよろこびは大きく、なにものにも替えがたいほどのものであった。

初めてお会いした杉本さんは、思っていた通り、きわめてもの静かな学道のひとという印象であった。向きあっていて、なにかこちらの日常までが宥められる思いがあった。

お泊りいただいたところは、延岡市の一隅にある、和風の五ヶ瀬旅館で、ちょうど鮎やなの時節ということもあって、暮れがたの寒い風もでていた祝子川の鮎やな場にみんなしてご案内した。同伴の者は、前述の六人に加えるに、詩人の高森文夫さん、その弟さんの医師、高森通夫さん、及び鮎脈社の川口敦己さんであった。この時に同道した本多利通もすでにこの世にいない。

彼を偲び、杉本さんを偲び私はこの十月に再び鮎やな場に行ってみたいと思っているところである。もしかして、そこで杉本さんのコスモロジーの一端に新たに出あえるかも知れない。

## 海とことば

北  
村  
均

貴方が黙って遠くへ旅立たれたとき

海光とことばのざわめきが

程よく釣合っていた私の風景は

黒い額縁に収められ持ち去られてしまった

今の私のことばには

重みがまったく感じられなくなって

気紛れに

海とことばを天秤にかけてみたりすると

例えば 夕映が

かならず西の空へ吸いこまれてゆくように

いつも海の方へ大きく傾いてしまうのです

だから街角をふと曲った時にも

私は溺死者なのです

涙が海水となじまないことを

知ったのが遅過ぎて

後悔の泡をぶくぶく吐きながら

どこまでも

どこまでも

沈んでゆく私なのです

去る七月六日早朝、杉本春生先生が永眠された。六月三日に相良平八郎さんの砂嘴三七号の合評会が岩国市で持たれたとき、私も参加させてもらったのだが、その席へ、元氣というか、病弱だった先生のいつもと変わらぬ様子で顔を出され「いやあ、このような合評会に出るのは何年振りかなあ」と口ごもりながら、例の調子で批評をされているのうかがって何故か安堵したばかりだったので、突然の訃報に接して、しばらく言葉もない有様であった。

選者になられたばかりの昭和四十三年、一年間を回顧した『中国詩壇』この一年の文末を「さらに初心の人の送稿を望んでやまない。貧しい感受性しかもたない私ではあるが、そうした「肉声」にたいしては精いっぱい、アンテナの役割を果たしたいと願っている」と結ばれているが、それから二十三年間その態度は終始一貫して変わることは無く、広島県詩人協会の会員の多くが、先生の詩の洗礼を受けていることは周知の通りである。また先生には、顧問という形で同協会の発展に力添をいただいており、先生を失うことは、会員全員の悲しみであると同時にまた、大きな傷手でもあると言える。

その鋭利な批評・清潔な人柄から、井野口慧子さんは「杉本先生には、水晶という言葉がぴったり」と葬儀の翌日電話で伝えてきたが、その彼女宛の新川和江さんの手紙にも、「水晶の柱が一本倒れたような、驚きと痛みを味わっております。ほんとに、あと十年、お元氣でお仕事をして頂きたい方でした」と書かれていたのには驚かされた。また先生自身も「資料・現代の詩」（日本現代詩人会編 昭和五十六年・講談社）の自選詩に「川」という作品を載せており、その中に「微風に水晶の旋律は慄えていた」という一行が織りこまれているように、結構本人も水晶のイ

メージを好ましく思っていた節もうかがえる。

ところで、同じ詩の最後の行は「川は／なまめかしい帯のように流れ始める」と結ばれている。この一行に出会った時、私は、外観から受けるイメージと異なる、先生の内面の熱い思いに触れたようで、一瞬鳥肌の立つのを覚えた。例えていうならば、宝石はそれ自身で完結した美を持つが、その宝石が美しい女性の、あるいは恋人の手になるとき、もっと異なった輝き、さらなる美を獲得する。それが宝石における杉本先生の「自然」と言うものではなかったのだろうか？ ある物に触発されるとき、そこにたえず、人間の存在、という有機質なものを嗅ぎとってゆく。そこに鋭く澄んではいるが、ガーゼににじむ血のような傷みとぬくもりの通う批評が可能であり、私達は先生の評論や批評を読みながら、なぜか「ホッ」と心安まるのではなかったのだろうか？

とまれ、私達はもはや先生の声を聞くことはできない。先生、水晶の彼方、心安らかにお眠り下さい。

合掌

女子大へ講師として来られていた杉本先生に、詩をみていただくという話になったのは、あれは一体どうい  
きさつがあったのだろうか。私たち三人は、それぞれの思いをもてあました高校生の延長で、あるとき唐突に、（少  
なくとも私は）詩を書き始めた。二つ上の野口さんが、我々三人のかじとりをして下さらなければ、どうなってい  
か分からないような、てんでばらばらな三人だった。

今、どう思い起こそうとしても思い出せないのだが、もしかしたら、野口さんが、杉本先生に話をして  
下さったのかもしれない。とにもかくにも、吹きだまり（ー）のように打ち寄せられた三人が、言葉をつむぎ始め、  
そして言葉をつむぎ続ける上での、一つの大きな出会いであったことは間違いない。我々三人は、あまりにも若すぎ  
て、とんでもない思いこみをもっていたが、その思い込みのとんでもなさ<sup>に</sup>気づくほど冷静でもなかった。周囲の奇  
異なものを見るような視線にも全く気づかぬほどに、言葉をつむぐという作業に没頭し、また陶醉していたように  
思う。

大学の四年間の思い出は、（思い出というものは、みんなそんなものだとは思<sup>う</sup>が）すべてが、なんだかぼやけた  
スポットライトをあてられて輝いているようにも思える。それが懐しいことであれ、もう思い出したくないやな  
出来事であれ、そこだけはっきりと、宙に浮いたように、日常から切り離されて、突如として脳裏によみがえって  
くる。そして、私の中に浮かんできくるスポットライトの中の杉本先生は、どこかクラシカルな「場末の」（たしかにあ  
のとき先生はこうおっしゃった）喫茶店で、「うん、これなら百五十円の価値はあるね」と、そして、「やっとこま

で来たか」と言ってお下さったのだ。

その前後のことは、全く記憶にないが、そのひと言が、ばらばらになりそうな我々三人を、結果的に四年経ったとき、「おぞん」という作品集として、ひとつに結びつけてくれたきっかけであつたように思われてならない。

杉本さんとの関係は、元山（現在朝鮮民主主義人民共和国）中学の先輩、後輩の間柄に始まる。昭和二十年四月に入学した私は、八月の終戦で福岡の本籍地に引き揚げた。終戦前後の体験を小説にしたのが二十年前。その小説を杉本さんがある新聞の書評で取り上げてくれ、切り抜きと手紙が送られてきた。好意的な書評に感激し、早速文通、電話での交際が始まった。

大変物静かな人で、だまって座っているだけで存在感のある人だった印象がある。評論分野での代表作「森有正論」で杉本さんが国際基督教大学の哲学者森有正氏を訪ねる場面がある。教会のパイプオルガンを弾いている場面で、「オルガンに覆いかぶさるように、かじりつくように弾いていた」と初対面を表現していた。彼は理論家というだけでなく詩人としての体質を感じさせる好エッセーを書き続けた。

彼はまた、新人や若い人の作品を読むのが熱心だった。われわれの仲間で機関雑誌「文体」を出していたが、ある時「もしよかったらこれを読んでみてくれ」と物静かだが、自信にあふれた表情で新人の作品を持ち込まれた。作品は採用となり掲載された。若い人の力量や長所を巧みに引き出し、伸ばしてやる面倒見のよい人だった。

十五年前には中国新聞の企画で「異境体験・文学・人間」と題し対談した。旧植民地で生活した人間の文学の特徴を外国の例も交えながら大いに語り合った。その後二人で仕事以外でのんびり宮島を散策したのが楽しい思い出の一つだ。

二年前、中国新聞新人登壇文芸作品懸賞募集の入賞者表彰式で広島を訪れた際、料亭でお会いした。お酒の飲めな